

# 末黒野

すぐろの

3月号  
(通巻907号)



## 夕照

池の面へ天守を映し実南天  
朝の気の緊まる境内花八手  
山上の小さき門跡姫椿  
冬紅葉胸にわづかに燃ゆるもの  
坂の街坂のはるか片しぐれ  
冬落暉湖に影濃き竹生島  
神籬のとどむる夕日笹子鳴く  
夕照の沼のさざなみ枯蓮  
冬の雲重たく載せて伊吹山  
迫り出せる大岩抱き山眠る  
水鳥の滲のくづして逆さ富士  
八方へ綺羅の穂波や枯芒

森清堯

## 村時雨

久々の旅の支度や神無月  
松籟の笛めく海辺冬ざる  
寄する波引く波白し冬落暉  
潮入の運河船なし冬かもめ  
遠ざかるバスの尾灯や村時雨  
白濁の出湯の川や冬紅葉  
紅葉散る河原や寂と石地蔵  
佗助や蘇芳色なる仁王門  
大仏の背に開く小窓冬ぬくし  
火袋に僧の座像や銀杏枯れ  
凭るればささめく大樹枯野道  
栗鼠のとぶ雑木林や龍の玉

岡野里子

冬すみれ

黒滝志麻子

(顧問)

雨雲の居座ってゐる枯野かな  
 雲もなく空がらんだう冬ざるる  
 逃げやすき日を捉へたり冬すみれ  
 冬鳥や老いのたくみな鋤使ひ  
 泥濘の大き足跡山眠る  
 冬灯ひろげて逸る世界地図  
 一瞬に消ゆる樹海や冬の霧  
 鳥翔ちて枯れの深さの残りけり

甲矢集

配列は音順(月毎の循環)



竹生島

森清信子

叡山や紅葉かつ散る大鳥居  
 見つむれば生まるる翳り帰り花  
 枯蓮や鈍き日差をたぐる池  
 夕日濃き湖の入江やかいつぶり  
 水鳥や湖面綾なす朝日影  
 落葉踏み一社一寺の竹生島  
 湖の鯿へ近づき鴨の陣  
 冬日燦メタセコイアの並木道  
 山の端に触れて燃えたち冬落暉  
 せせらぎと別るる野道石路の花

紅葉晴

石黒興平

到来の芋殻妻を忙しくす  
 苔庭にもみぢ葉を措く庭師かな  
 大輪の菊を生け込み桶の花器  
 反橋の緋とひびき合ひ照紅葉  
 購ひし墓清めたり紅葉晴  
 玻璃越しの紅葉の映る座卓かな  
 日面の色濃き黄葉地裁前  
 反橋も平橋も朱や紅葉散る  
 二の酉の切火加はる手締めかな  
 海昏く螺鈿の如き百合鷗

## 冬黄葉

菅野日出子

## 一夜変

田中臥石

塗替への終へし我が家や冬夕焼  
落日の空へ彩まし冬黄葉  
目を細め見上ぐる空や冬桜  
あるなしの風に舞ひ散る冬もみぢ  
羽根布団するりと手繰り夜半の風  
冬銀河鬼籍に入りし友の数  
僧坊の昼餉の匂ひ冬雀  
冬月に祈る平癒をベッドより  
一合の酒に饒舌河豚汁  
永らへて足手纏ひとなる師走

入院の一気に決まる枯あざみ  
冬空のこころ淋しきまで青し  
山茶花の咲き出して明日入院す  
けふひと日庭の山茶花と茶を喫す  
冬の廊担送車へと乗せられて  
透析の液と血の管冬日射す  
やうやくに透析終る冬落暉  
透析の合間の窓や紅葉濃き  
ポストまで投句急げり冬の廊  
波郷忌や暮れていきなり腎不全

## 乙矢集

配列は音順、月毎の循環



先師の忌

斉藤マキ子

起伏ある大根畑鳶の空  
さねさしの相模の風や懸大根  
検診のガウン冷たし地下二階  
千両の真紅の雨滴先師の忌  
初雪やするしばかりを草に置き  
亡き人に腹を立てをり冬至粥  
強情は祖父に似たるか胼薬

冬安居

加藤静江

小夜時雨

高木邦雄

本捨つる空しさ抱へ文化の日  
名刹の鎮もり深し冬安居  
神無月大仏の背の窓の開き  
北風止んで湖の深さの戻りけり  
冬月の空に濁りのなかりけり  
冬晴や旋回続く練習機  
堰音や一山綾に冬紅葉

大銀杏落葉しぐれのきりもなく  
落葉焚ほむらの先に一つ星  
山茶花の咲き初むる丘汀女句碑  
能果てて街は音無き小夜時雨  
木枯や杉玉揺るる酒肆の軒  
衿立てて終バス待つや北風の中  
霜の朝背筋伸ばして一万歩

冬紅葉

長尾タイ

冬紅葉 溪谷渡る一両車  
冬うらら膝の駅弁分かち合ひ  
敷石の一步に仰ぐ冬紅葉  
山茶花の散り積む紅や手に溢れ  
冬帽子指の覚えし模様編  
煌煌と灯る鎮守社年用意  
能楽堂の洩れくる音色年詰まる

冬紅葉

大川暉美

身に入むや恩顔うかぶ師の忌日  
惜年や墓に詣でて師を惟ふ  
一閃の切りさく闇や冬の雷  
小流れの日差し躍るや冬紅葉  
岬鼻へ野水仙の香一直線  
山裾の孤高の色や木守柿  
相輪の沈みゆく闇冬の月

北窓塞ぐ

今村千年

今宵はも親族兄弟おでん鍋  
寒がりの猫に北窓塞ぎけり  
耳遠き二人もの言ふ寒さかな  
影二つ銀杏並木の落葉踏む  
世田谷のぼろ市いまも襤褸豊か  
茶の花の咲きて漫ろや阿弥陀堂  
尼寺や名の木一つに返り花

年の暮

太田良一

山小屋の滾る湯沸し山眠る  
快速の停まる新駅冬ぬくし  
冬の灯を集めて暗き宿場かな  
霊山の麓の里や牡丹鍋  
七色に変はる港の聖樹かな  
枯桑の宿の家伝の地酒かな  
拍子木を打つて幕切れ年の暮

里神楽

岡田史女

函嶺を遥かに望む寒日和  
眺望の帰帆の海や枯木山  
寒林の中を堕ちゆく滑り台  
奉納の子供歌舞伎や里神楽  
辻棲の合はぬ話やちゃんちゃんこ  
為すことの多さに年のつまるかな  
機嫌悪き電動ミシシタ時雨

バツカス

小田嶋野笛

甌穴を出でぬ小石や崩れ築  
晩学や机に銀の木の葉髪  
老いらくの恋の噂や神の留守  
バツカスは置いて行かれよ神の旅  
八百万の旅装束や神渡し  
あたたためて履く白足袋や惜命忌  
東京の愛宕の山も眠りけり



# 青炎集

森清 堯選

横浜 布施由岐子

クロワツサンめく雲ひとつ小春空  
大島の影の幽かや枯野原  
騎馬武者のごと一陣の落葉風  
冬蝶や終章の地を這ふやうに  
魚釣りはポーズか老いの日向ぼこ  
帰るさの背や地物の冬野菜

茅ヶ崎 嘉味田朝

横浜 上月智子

部分蝕スマホに写る月丸し  
来る一羽譲る一羽や木守柿  
冬空や闇を切り裂く打球音  
手術後の彼はベッドやアノラック  
周平の終幕風の枯野原  
幾度も計る血圧冬の朝

横浜 田中春江

相模原 板谷俊武

冬晴や鎌倉の山駆くる栗鼠  
冬ぬくき水の湧き出づ海蔵寺  
日々の糧背負ふ人々マスクして  
くつくつと仕切り仕切りやおでん酒  
義士の日や墓碑の享年読みすすみ  
獅子吼てふ扁額たたく北風

牡蠣剥きの三手もて済む手練かな  
炉話や膝を崩して箸止めて  
戸を繰るや眼を射貫く冬日差  
闊歩するゴム長靴や河豚の競り  
リハビリの患者疎らや雪雑り  
慣例の暦配や締めめの句座

横浜 滝口洋子

横浜 前原マチ

軒先の風や粉をふく柿すだれ  
影薄き月を仰ぐや大根引き  
雨上がり落葉の描く抽象画  
履きなれぬ草履は靴に七五三  
靴脱いで児の入る芝生冬日向  
冴ゆる夜や五分を探す流星群

庭石へ山茶花零れ喫茶室  
玻璃越しの眼下に望み冬怒濤  
お茶運ぶロボットに礼冬ぬくし  
古民家の櫓の明りやほつこりと  
聴秋閣に誰か居さうや白障子  
池越しの三重塔冬紅葉

横浜 池谷鹿次

横浜 六崎正善

冬麗や末広がりの船の水脈  
空風や四方に広がる草の波  
新巻を提げ老紳士バスを待ち  
釣銭のふくるる財布年の市  
教会の真白きクルス冬日影  
波の花浜に魚の供養塔

大根引く一家総出の四世代  
冬菜畑を抜け通字や団地の子  
ほろほると風を呼びたる枯葉かな  
箒目の大波小波落葉搔  
傍らの猫の寝顔や日向ぼこ  
一茶忌や納屋に置かるる一輪車

横浜 有賀鈴乃

横浜 渡辺美智子

七味屋の間口一間冬日影  
岸壁の波音高し冬茜  
街の灯の彩さまざまや冬ぬくし  
手こぎ舟ゆ手を振り振られ小六月  
瀬戸内のさざ波に日矢小春風  
熱爛に旅の姉妹や時止まり

遠忌なる夫の墓前や初しぐれ  
惣菜を売る一坪の小春かな  
病得し友との一会枇杷の花  
マフラーを無造作に巻く若さかな  
足裏に生まるる音符落葉道  
嫁ぎし子と即かず離れて根深汁

# 耕 土 集

## 岡野 里子 選



念仏のごとき旋律蚯蚓鳴く

横浜 宮崎 浩美

心做し秋風鈴の音老いて

切岸へ朝風強し野水仙

横浜 鈴木 英雄

老犬の歩みに合はせ秋日和

冬日背や路上に己が影長き

散りてなほ色の褪せざり柿落葉

海光や小春の風の相横湾

ひっそりと日陰に白し花八手

傍らに丸まる猫や日向ぼこ  
行く先を風に任せて落葉かな

相輪は里の標や山眠る

葉山 伊藤 美緒

白壁や我が影確と石路日和

月冨ゆる重機のアーム届くかに

横浜 佐々木澄子

牢屋めく塗装の足場根深汁

触手話や手袋脱ぎて懇ろに

少年の銀輪疾し冬木道

少女期には旨さを知らぬ冬菜かな

年の瀬やショーウィンドーを離れぬ子

骨密度上ぐる炒子や冬うらら  
人居らぬ墓への道や冬桜

冬銀河白骨の湯の深き闇

横浜 内山 みち

獣道足あと確と今朝の雪

下町の風情が好きで一の西

横浜 三浦千恵子

落葉焚く明神池の小屋仕舞

冬ぬくし幾度も読む友の文

真新なる障子の皺や鍋の湯気

リズミカルに爪切る音や冬初め

海荒れて雪となりたり佐渡島

撫られて知らんふりする炬燵猫  
指先のささくれ増すや冬ひでり

真つ赤だなと子等の歌声冬紅葉

横浜 秋山 文子

野の花を活けて取り込み野辺の風

日向ぼこそつと一人でメール打つ

横浜 毛利 直子

月食を隠す黒雲風冨ゆる

ピアノ無き部屋の楽譜や冬深み

鴨一羽ペットボトルを突きては

昔住む町のにぎはひ年の暮

銀杏落葉道きらきらと雨上り

数へ日や読みさしの本そのままに  
一年の思ひ出たたむ古曆

どつぷりとつかる仕舞湯柚香る

横浜 白居 澄子

滲み渡る臓や朝の根深汁

検診後の落葉踏む音晴れ晴れと

横浜 大庭美智代

皇帝ダリアのはやも凋落霜の朝

溪谷に沿ふ遊歩道枯葉踏む

古新聞開くや走るセロリの香

ドラえもんの手作りマスク六地藏

少年の蹴散らす枯葉スニーカー

身に纏ふ妣の紋りや冬羽織

教会の鳴らぬオルガン秋日射す

横浜 北野 節子

夕影や風にゆららか貴船菊

山茶花や紅を灯して敷きつめて

横浜 喜田 君江

文机や栞そのまま秋の暮

穏やかなる日々で在りたし冬董

落葉舞ふ風の旋律ヴィヴァルディ

鋭声張りいまだ健在冬の鴟

早朝のラジオの音や冬に入る

森の径突と兎の横切りて

犬小屋のペンキ塗立て日向ぼこ

横浜 佐藤 勝代

炬燵寝の母のかたはら薬箱

七五三撮られるよりも撮りたがり

川崎 木村 純子

袖湯染む半身浴に長湯して

訪問宅に用意されをりちやんちやんこ

点りたる書店の角の聖樹かな

子らの待つポニー枯芝食むばかり

銀杏枯る尖る梢の空真青

聖樹灯り歓声あがる競馬場